

化学物質の内分泌かく乱作用に関する日米二国間協力について

1. 経緯

平成 16 年 1 月に開催された第 12 回日米合同企画調整委員会において、化学物質の内分泌かく乱作用問題に関して日米二国間の協力を進めることが合意され、この合意に基づき、化学物質の内分泌かく乱作用に関する日米二国間実務者会議(以下、日米会議)が開催されることとなった。平成 16 年度及び平成 17 年度には、化学物質の内分泌かく乱作用による生態影響評価に関する情報交換を目的として、それぞれ第 1 回(平成 16 年 9 月、東京)及び第 2 回(平成 17 年 6 月、ハワイ)の日米会議を開催した。平成 18 年度以降は、化学物質の内分泌かく乱作用に関する生態影響評価に関する情報交換に加え、魚類、両生類及び無脊椎動物を用いて繁殖影響等を評価する試験法について、日米両国が協力して技術的な課題等を明らかにして開発を進めることを目的としている。

2. 日米二国間協力における取り組み

化学物質の内分泌かく乱作用に関する試験法が OECD においてテストガイドラインとして承認されるためには、各国共同で試験法の方法論や客観性、再現性を評価する必要がある。そのため日米二国間協力では、毎年、日米両国の実務者による会議(日米二国間会議)を開催し、主に魚類、両生類及び無脊椎動物の生殖や繁殖に対する影響を評価するための試験について、試験法や試験条件等の技術的課題について検討を行い、さらに日米共同で研究や検証試験等を実施することにより、知見や情報等の共有を図りつつ、これら試験法の OECD でのテストガイドライン化に向けた取り組みを進めている。

(1) 魚類の試験

魚類の試験については、平成 21 年 4 月に日米共同で OECD にテストガイドライン化のための新たなプロジェクトの提案書(SPSF)を提案したメダカ多世代試験 Medaka multigeneration test について、テストガイドライン化に向けた検討を進めてきた(試験法の詳細等は、別途、試験法開発に関する資料に記載のとおり)。

(2) 両生類の試験

魚類の試験については、平成 21 年 4 月に日米共同で OECD にテストガイドライン化のための新たなプロジェクトの提案書(SPSF)を提案した幼若期両生類成長・発達試験

Larval Amphibian Growth and Development Assay について、テストガイドライン化に向けた検討を進めてきた（試験法の詳細等は、別途、試験法開発に関する資料に記載のとおり）。

(3) 無脊椎動物の試験

無脊椎動物の試験については、日本ではミジンコを用いた多世代試験法、米国ではケンミジンコ及びアミを用いたフルライフサイクル試験/二世世代繁殖試験の開発を進めていることから、日米共同でこれらの試験法及び試験結果の比較等を行いつつ、試験法のテストガイドライン化に向けた検討を進めている。

3．平成 26 年度の成果について

平成 26 年度は、第 10 回日米二国間会議（平成 26 年 9 月 9 日～10 日、米国ワシントン D.C.）を開催し、これまでの日米間での協議結果等を踏まえて協議を行い、魚類及び両生類の試験法について、テストガイドラインの日米合意案をとりまとめた。これらのテストガイドライン案は、日米共同で OECD 事務局へ提出した（以降のテストガイドライン案に関する検討状況等は、試験法開発に関する資料に記載のとおり）。

4．平成 27 年度の実施内容について(案)

第 11 回日米二国間会議（平成 27 年 9 月頃、米国ワシントン D.C.及びミネソタ州ダールズを予定）を開催し、今後、日米二国間協力の下で進めるべき検討事項に関する協議を行うほか、化学物質の内分泌かく乱作用の評価に関する日米の取り組み状況について情報交換を行う。